

6月5日 使徒言行録2章1～11節 今日の説教から

説教題：「聖霊の賜物を受けて」

今日の聖書箇所では、聖霊が弟子たちに働いたペンテコステの出来事が記されています。私たちキリスト教会の始まりの日でもある出来事です。過越祭から数えて50日目に行われる「春の収穫祭」として守られていた五旬祭の時に、弟子たちのもとに聖霊が注がれました。

弟子たちのほとんどはイエス様と同じアラム語を話すことが出来ました。その中でもごく一部の人だけギリシャ語の読み書きができたようです。彼らは決して高度な教育を受けたわけではない「普通の人々」です。そんな漁師や農家や羊飼いたちの口から「自分の故郷の言葉」で語られる神様への賛美を聞くという事は、エルサレムに集まって来たユダヤ人たちにとって驚くべき出来事でした。ギリシャ語もあればラテン語も、エジプトの言葉もあればアジアの言葉も話された事でしょう。もし仮にここに日本生まれのユダヤ人がいたとすれば、日本語でも福音が語られたのかもしれない。

このように、聖霊が力を注ぎ常識では考えられない言葉を語らせることを、「異言」と呼びます。この異言についてはあまり触れる機会がないのですが、いくつもある教派の中でもペンテコステ派やカリスマ派と呼ばれる教派では異言を大切にしているようです。純粹に理解しないはずの外国語を話す場合もあれば、この世には存在しない言葉を話すこともある、この異言の賜物が聖霊によって与えられ、弟子たちはイエス様を主とした教会として用いられることとなります。

このように聖霊は私たちに「異言を語る力」を与えます。ほかにも聖霊は「異言を解釈する力」を与えたり、「賜物を与える力」「教会として結び合わせる力」「祈りを伝える力」「真理を悟らせる力」を持っています。イエス様から真理を伝え聞いていて、それでもそれを外国の人には伝える力をもたなかった弟子たちに対して注がれた聖霊は、彼らに語る力を与えました。ユダヤ教の常識の中で散り散りになっていた人々は、聖霊の力でイエス様のもとに一つに集められました。そして、この聖霊によって与えられる様々な賜物の力を受けて、私たちの教会は今日も礼拝を行うことが出来ているのです。

以前、神様のことを旧約聖書が証ししている、イエス様のことを新約聖書が、特に福音書が証ししていると話しました。そして、「聖霊を証しする福音書」のようなものがないから私たちは聖霊についてあまり知らないのでは、とも言いました。もちろん新約聖書の手紙の多くは、聖霊を受けて教会を作るべく、キリスト者を増やすべく活躍した弟子達の働きの産物ですから、それ自体が聖霊を証ししていると言っても間違いありません。しかしそれだけではなく、聖霊に押し出されている私たち自身が、私たちの業一つ一つが、聖霊を証しする「言葉」であると言ってもいいのではないのでしょうか。

私たちは行いによって、時に言葉が伝わらないような人に対しても神様の愛を伝えることが出来ます。日々の生活の中で行う様々な行動の中で、平和を実現するために行う募金活動などの中で、また私たちが今日もこの地で礼拝を行うそのこと自体によって、私たちは神様の言葉を行う者として用いられています。それこそがわたしたちに聖霊が注がれていることの証しであり、この世を神様が愛してくださってくれていることの証しであり、イエス様の導きを確かに受けていることの証しになるのです。

私たちが御言葉を実現する者となることが出来る、その聖霊の働きを受けて、今週一週間の、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：使徒言行録2章1～11節

- 1:五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。
- 5:さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者があり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」